

# OLIVE-SPIRIT

関東学院学報 オリーブ・スピリッツ

September, 2016

No. 51





## 湘南・小田原キャンパスが高度研究と産・官・学連携の拠点に 「国際研究研修センター」2017年4月開設

2017年4月、関東学院大学は研究・教育・社会連携の拠点として、湘南・小田原キャンパスに「国際研究研修センター」を開設します。産官学協働で名を馳せる「材料・表面工学研究所」を中心に、滞在型の研究研修センターとして、国内外から研究者、技術者の受入れを開始。第二、第三の研究所構想に加え、学院の児童、生徒、学生たちが研修に利用できるセンターを目指します。同センターの特色と今後への期待について、規矩大義学長と本間英夫所長に語っていただきました。



関東学院大学 学長

### 規矩 大義

九州工業大学大学院工学研究科設計生産工学専攻博士後期課程修了。横浜国立大学助手を経て、官民の防災研究の現場を経験。2002年関東学院大学工学部着任。2013年12月本学学長就任。



材料・表面工学研究所 所長  
関東学院大学 特別名誉教授

### 本間 英夫

関東学院大学工学研究科工業化学専攻修士課程修了。同大学助手を経て、1982年大阪府立大学で工学博士学位取得後、関東学院大学工学部教授着任。2010年材料・表面工学研究センター（のちに研究所）所長就任。2012年関東学院大学特別名誉教授。

### 国内外の人材や企業と交流し 社会に貢献する研究拠点へ

2017年4月より法学部が横浜・金沢八景キャンパスに移転します。そして湘南・小田原キャンパスは、よりグローバルかつ高度な研究拠点へと生まれ変わり、新たに「国際研究研修センター」が設立されることとなりました。

センターの核となるのが「材料・表面工学研究所」です。「めつき」を中心とした表面処理の技術で世界をリードする研究機関であり、近年は食品分野や医療分野でも成果が目まぐるしく伸びています。これまで横浜を拠点に産官学協働を進めてきましたが、より充実した施設と、企業や海外からの研究者、技術者を受け入れるための環境を小田原に求めました。小田原市や近隣自治体、

### 産官学協働のパイオニアが 新天地でさらなる発展へ

来春の国際研究研修センター設立に伴い、私たち「材料・表面工学研究所」は湘南・小田原キャンパスに移転。工学系の研究拠点の形成および大学院の整備を進めていきます。研究スペースはこれまでの約3倍。新たな環境で企業との連携を強化し、小田

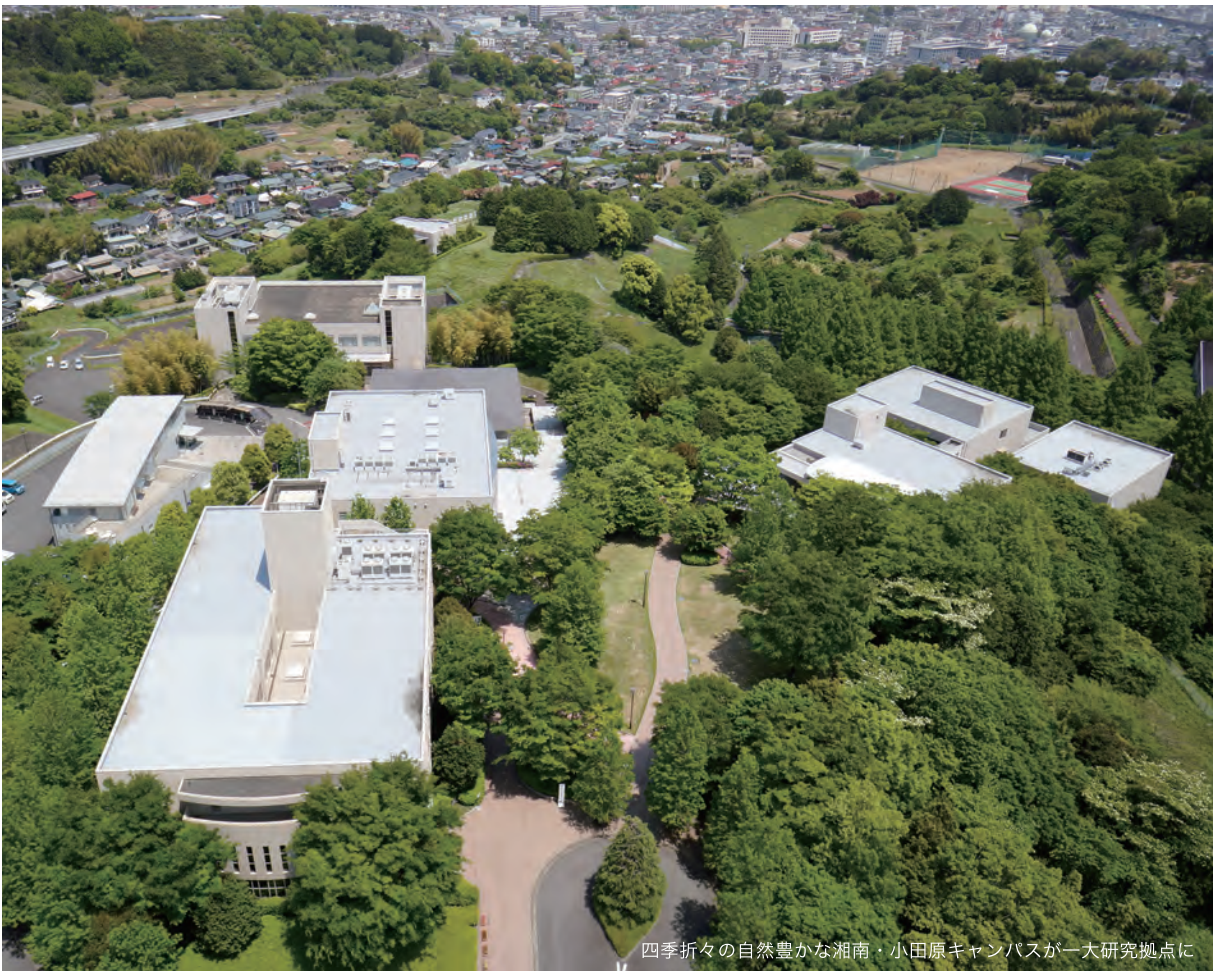
働に取り組んできました。そのルーツは今から70年前、大学の前身である工業専門学校の敷地内に実習工場を作ったことに始まります。その後、めつき技術を生かした自

地元企業とも連携を深めて、産業界だけでなく、地域にも貢献したいと考えています。関東学院大学は今年ベトナムに事務所を開設するなど、今後ますます海外との学術交流を推進していきます。本センターは「滞在型の研修施設」としての機能を備え、国内外の大学や企業からの研究者、研修生を中長期的に受け入れることが可能です。国際共同研究や、海外への技術移転の最前線に学生が立ち会うことができれば、素晴らしい経験と成長につながります。学院全体としても、例えば小・中学校の生徒を対象とした語学研修合宿や、大学生のゼミやサークルの合宿など、様々なニーズで活用したいと考えています。

### 固定概念や結果に捉われず 真理探究できる環境を作る

自然豊かな湘南・小田原キャンパスは、実験研究に没頭するだけでなく、思索を巡らし、真理を追究するには最適な環境です。材料・表面工学研究所に次ぐ、第二、第三の研究所設置を目指しますが、固定概念に捉われず、フレキシブルに研究所を作れる体制が理想です。また、若く意欲にあふれた研究者に対して、例えば2年間といった一定期間投資して、研究をサポートすることも一案です。将来、研究の芽が出て、その成果が社会貢献や人材育成につながれば、賞や特許を得る以上に、大学にとっては遙かに価値のあることです。

国内外から優秀な人材が集まることは、教員や学生に刺激を与え、大学全体の活性化にもつながります。自由な発想で真理を



四季折々の自然豊かな湘南・小田原キャンパスが一大研究拠点に

動車用金属バンパーの開発等を経て、1962年にプラスチックめつきの実用化に成功。国内外に大きなインパクトを与えました。当時、大学院生だった私は、世界を先導する技術に興奮しながら研究に励んだことを憶えています。

関東学院大学は、この技術の特許を取得せず世界に公開。自動車部品の軽量化による燃費向上に大きく貢献しました。すぐれた技術こそ、オープンにせよ。それが本学の研究者魂なのです。その後めつき技術を、半導体やプリント基板の接続に応用。携帯電話やスマートフォンなど電子機器の小型化に寄与しています。

### 真の産官学協働とは何かを考え 技術革新と人材育成に挑む

材料・表面工学研究所は2010年設立。現在、提携企業は約50社に上ります。近年はめつき以外にも、超撥水・超親水などの表面加工、血糊の付かないメスなどの医療器具、さらに機能食品分野の開発も盛んです。例えば大豆由来のアレルギーフリー食材には、すでに小田原近隣の企業が強い関心を寄せてくださっています。また、米カリフォルニア大学アーバイン校（UCI）のほか、ドイツやアジアなどの研究機関と提携。海外との人材や技術の交流もさらに活発になるでしょう。

湘南・小田原キャンパスで、材料・表面工学分野の優秀な研究者や後進を育てる。その環境を整えることが私の仕事です。本学ならではの産官学協働のあり方を常に考えながら、社会に貢献し続けたいと思います。



## 社会と関東学院大学をつなぐ窓口

## 「社会連携センター」の目的と活動

関東学院大学は、地域・社会のニーズと、大学の教育・研究のニーズをつなぐ窓口として、2014年4月、「社会連携センター」を横浜・金沢八景キャンパスに開設しました。実社会で地域活性化や事業創出に取り組みプロジェクト型教育が注目される中、自治体や企業とのネットワークを駆使して、学生の学びをサポートしています。今回は同センターの江口幸史課長に、開設からの2年半の活動を振り返りながら、その手応えや今後の方向性についてお聞きしました。

### 地域活性化や産学連携のコーディネートとして

文部科学省は、急激な少子高齢化の進行、地域コミュニティの衰退、グローバル化の進展、新興国の台頭による競争激化など、社会の急激な変化を受け、2012年に「大学改革実行プラン」を発表しました。大学教育の質的転換、グローバル人材育成、「地域再生の核としての大学づくり」という、ここで再定義された大学の社会的な機能を果たすため、関東学院大学では、多くの議論を経て、2014年に「社会連携センター」を開設しました。

それまで個々の部署や教員単位で行っていた産官学連携活動の窓口を一元化。学外からの様々な依頼や提案に対して、教育効果等を検討した上で学内の最適な部署や学部につなぐ。あるいは学内から発生したプロジェクトに対して、これまで構築したネットワークを駆使して企業や自治体につなぐことが、本センターの主な役割です。

自治体や企業にとっては大学の資産がより活用しやすくなり、大学にとっては産学連携や学部をまたいだ活動が増えるなど、双方にメリットが大きいと考えています。対外的な窓口が明確になったことで、地域との関わりも活発化。一昨年は逗子市、昨年は葉山町や湘南信用金庫と包括協定を締結するなど、これまで以上に地域の持続的発展や課題解決に向けた取り組みに力を入れています。

さらに、一般市民向けの公開講座等についてもあり方を見直し、大学ならではの深い学びや、人材育成の観点から社会人向けの新しい講座を創生するなど、研究成果を社会に還元しています。

### プロジェクト型教育を推進して学びの幅を広げていく

最近の企業とのコラボ例としては、経済学部経営学科の学生のビジネスアイデアを実現した「Kiribizマルシェ」(P7参照)

### センター設立から2年半

#### 「これまでの社会連携活動例」

#### ■富士通の開放特許を活用したビジネスプランの創生

昨年度、公益財団法人横浜企業経営支援財団(IDEC)のマッチングにより、富士通の開放特許を活用した学生たちのビジネスプランを、横浜市内の中小企業に対して提案。このうち「打音分析による物品検査技術の特許」を活用して、野球のバットの疲労度を打音で検査するスマートフォンアプリ開発を提案した経営学科のゼミが、「知財活用アイデア全国大会」に進出してプレゼンを行いました。学生たちは横浜DeNAベイスターズへのヒアリングを実施。また、理工学部の非破壊検査を研究する教員に調査を依頼して、プレゼンの精度を高めました。結果的には商品化には至っていませんが、ビジネスプロセスを一通り経験できたことは学生にとって大きな糧となりました。この産学連携の取り組みは非常に有意義なので、今年度も継続して参加しています。



▲知財活用アイデア東日本大会プレゼンテーションの様子

#### ■横浜市金沢区・南部市場の活性化

南部市場は昨春、横浜市中心卸売市場に統合されて卸売市場としての役割を終え、現在は加工・配送等の拠点として運営されています。そこで、市場に併設する商店会「共栄会」と本学がタッグを組んで南部市場の活性化に取り組んでいます。現代コミュニケーション学科のゼミの学生が、お客さんや店主への市場調査を行ったり、空き店舗の活用について検討。時にはお祭りに参加して焼鳥を売りながらアンケートを取るなど、共栄会と交流を進めてきました。そしてこの8月、南部市場を紹介する「ミニコミ誌」第1号を制作・発行。市場や金沢シーサイドラインの駅、横浜市金沢区役所などで配布されました。第1号はバーベキューをテーマに、市場の魅力の再発見や来客数の増加を狙った内容。今後も様々なアイデアでの連携が期待されます。

#### ■そごう横浜店30周年記念ビールのラベルデザイン

昨年、そごう横浜店開店30周年を記念して販売された地ビール(横浜ビール醸造)のラベルデザインに、人間環境デザイン学科の学生7名が挑戦しました。学生たちはデザイン考案にあたり横浜ビールでの工場見学などを実施。コンペの結果、海や空をイメージした「青」を基調に横浜の風景を描いたデザインが採用され、実際にそごう横浜店で販売されました。



◀そごう横浜店30周年記念ビールラベルデザイン

#### ■湘南しらすのPRポスターデザイン

一昨年、関東学院大学と神奈川県しらす船曳網漁業連絡協議会による産官学連携で、湘南しらすのPRポスターデザインコンテストを実施。人間環境デザイン学科の学生14名が参加しました。学生たちは実際に湘南しらすの漁や生産現場を見学。釜揚げされたしらすの写真を大胆に配置した作品が学科から選出され、湘南しらすを取り扱う店舗で掲示されました。



▲PRポスター制作のため湘南しらすの生産現場を見学。

#### ■湘南グリーンレモンケーキのPRポスターデザイン

洋菓子店プチ・フルール(P13参照)を運営する横尾商事が開発した「湘南グリーンレモンケーキ」のPRポスターデザインに、人間環境デザイン学科の学生9名が挑戦しました。「湘南グリーンレモンケーキ」は、小田原市根府川で収穫された早摘みのレモンを使用した焼き菓子で、湘南信用金庫などの産学連携の一環として、そのプロモーションに協力しました。学生たちは商品を試食し、レモンが栽培される様子を見学して情報を収集。最終的に4名の案をもとにポスターとリーフレットが作成されました。現在、県内や都内のプチ・フルールの店舗で活用されているほか、今春にはアジア最大級の食品・飲料専門展示会「FOOD EX JAPAN 2016」でも展示されました。



▲湘南グリーンレモンケーキのPRポスター



関東学院大学 社会連携センター 社会連携課長

### 江口 幸史

「一つとして同じ形の社会連携はありません。内容も進め方も手法も一つずつ丁寧に対応しながら、教育コンテンツとして展開していきます」



## 学生がリノベーションで地域再生に挑む

# 「KGU空き家プロジェクト」に注目！

人口流出、高齢化、空き家の増加。様々な問題を抱えた横須賀市の谷戸地域。この難題に「自分たちの手で空き家を改修し、シェアハウスとして活用しよう」と二人の学生が立ち上がったのが始まりでした。こうして動き出した「KGU空き家プロジェクト」。追浜地区の老朽空き家を有志学生がリノベーション。第一弾のシェアハウスに続き、第二弾はコミュニティスペースとして再生し、地域交流も広がっています。その成果と今後の展望を、人間共生学部兼子朋也准教授にうかがいました。

### 学生の発案でまちを元気に 空き家をシェアハウスに再生

横須賀市には、丘陵地が浸食されて谷状に入り組んだ「谷戸」と呼ばれる地域が点在しています。平地の少ない同市では、こうした地域も宅地として開発されてきました。そして現在、住民の高齢化に伴い、大きな社会問題に直面しています。

「横須賀市は2013年、転出者が転入者を上回る『転出超過』が全国市町村でワースト1となりました。とりわけ谷戸地域は急な階段が多いことから、人口流出や空き家問題が深刻化しています。こうした現状を授業などで知った二人の学生が『卒業研究で、空き家を改修してシェアハウスを作りたい』と申し出てきたんです」

それが2014年春のこと。学生が自ら発案してくれたことがうれしかったと兼子准教授は振り返ります。

「大学としても、実社会で課題に取り組むプロジェクト型の教育を推進していたこ

ともあり、よし、頑張れ！」

そこで、学生たちは大学に近い追浜地域をくまなく歩き回り、空き家の現状調査を開始。百数十軒の空き家物件を確認する中で、谷戸に空き家を所有する一人の大家さんとの出会いがあります。

「その大家さんがたまたま関東学院大学のOBの方で。学生の話を聞いて、ぜひ協力したいと賛同してくださったんです」

こうして空き家プロジェクト第一弾が始動。二人の学生が中心となり、ゼミの枠を超えて約20人の有志学生によるチームが発足しました。もちろん、学生たちに大工仕事の経験はありません。

「改修工事にあたっては、追浜の工務店さんが協力してくださることになり、学生に一から技術を指導してくれました。本当に感謝しています」

改修費用の3分の2は横須賀市の補助制度を活用。残りは大家さんが負担することになり、2015年1月から3月末にかけて工事を行いました。床の張り替え、壁の

### 地域と学生をつなぐ拠点へ 第二弾は「集う家」を創出

第二弾は、同じ追浜地区にある築約70年の木造平屋住宅が対象となりました。

「一軒目よりも老朽化が激しく、大掛かりな工事が必要な物件でした」

活用方法を検討した結果、学生と地域が交流するコミュニティスペースとして再生することが決定。参加した学生は約30人。改修費用は、神奈川県地方創生大学連携事業の助成金制度を利用しました。

「空き家を改修しながら、工務店さんが学生に技術研修を行うプログラムとして実施しました。今回協力してくださったのは、大学近くにある工務店さんです。こちらの社長がまた偶然にも関東学院大学のOBで。関東学院のためならと快く引き受けてくださり、工具の使い方から施工法まで丁寧に指導してくださいました」

こうして2015年12月着工。ジャッキアップして歪みを矯正し、床を作り直すな

ど、本格的な工事で大変だったとか。休日には卒業生も手伝いに来てくれました。

「改修だけでなく、少しですが増築も行いました。授業では模型を使って学んだことが、実物大で形になっていく。これは本当に貴重な経験なんです。学生たちは床が張り上がったたり、ドアがはまったりするたびに感激していましたね」

第二弾の改修は今年3月に終了。生まれ変わった空き家は、花のインスタレーションなど手作りのアート作品を天井から吊るし、若者らしいおしゃれ心も反映した空間となりました。5月24日にはお披露目会を開催。穴を開けた竹に灯りをともし、幻想的な「竹あかり」の演出や学生の手料理で地域の方々を迎えました。

学生たちの活動はこれで終わりではなく、今後も様々な交流の場として、地域への定着を図ります。具体的にはこのコミュニティスペースをどのように活用していくのでしょうか。

「空き家プロジェクトの情報センターとして活用するほか、高齢者世帯の草刈りや庭

珪藻土塗り、キッチンパネルのシートの張り替えなど、初めての経験に四苦八苦しながら作業を進める学生たち。高台で見晴らしが良い点を生かしてウッドデッキを設置するなど、暮らしを楽しむ工夫も施しました。

「セルフビルドの楽しさや達成感を味わいながら、まちづくりにも貢献できる。学生たちがいきいきと作業する姿を見て、これは非常に良い教育だと確信しました」

こうして完成したシェアハウスには3名の学生が入居。プロジェクトを通じて地域住民との交流も活発化したそうです。

「町内会と連携して、盆踊りの櫓を組む手伝いをしたり、追浜祭りの神輿を担いだり。学生たちは積極的に地域貢献に励んでいるんですよ」

第一弾における学生たちの取り組みは報道機関でも紹介され反響呼びました。そして空き家活用プランの検討を継続する中で、早くも数ヶ月後には新たなプロジェクトが始動したのです。

掃除といったサービスマーケティングの窓口、授業や部活動の発表を行うギャラリィ、およびイベントスペースとして活用したいと考えています。そのために週2日程度、学生が常駐する体制を整えていく予定です」

学生が講師を務めるパソコン教室やスマホ教室、ものづくりのワークショップを開催する構想もあるそうです。

### 第三弾は逗子をフィールドに 新たなプランが着々と進行中

これまでのプロジェクトを通じて、学生の成長を実感したという兼子准教授。いずれはここでの経験をもとに起業する学生が現れてくれたらと思うそうです。

「地域に根づいて活性化に取り組む人材が出てきたらいいなと。地方から来ている学生も、この経験をそれぞれの地元に戻元してもらえたらうれしいですね」

第三弾への期待も高まる中、今後の展望についてうかがいました。

「現在、同じ共生デザイン学科の日高先生が中心となって、逗子市が所有する旧野外活動センターの活用方法についての検討が進んでいます。これは10年近く使われていない鉄筋コンクリートの空き施設。クリエイターたちが集う、アトリエと居住空間が一体となった施設として再生する案が検討されています。現代版のトキワ荘といった感じでしょうか」

空き家を再生させ、新しい息吹を吹き込み、まちに明るさを取り戻す。地域活性の新たな可能性に挑戦する「KGU空き家プロジェクト」に今後もご注目ください。



関東学院大学 人間共生学部 共生デザイン学科 准教授

### 兼子 朋也

名古屋工業大学大学院都市循環システム工学専攻博士後期課程修了。専門分野は建築・都市環境デザイン。三浦半島・湘南エリアを中心に地域活性化に学生とともに取り組む。空き家プロジェクトだけでなく、地域発住民主体のアートプロジェクトを支援する活動も行っている。なお、空き家プロジェクトの取り組みはFacebookで随時更新中。

<https://www.facebook.com/oppamaproject>



▲七夕には浴衣を着た学生による地域交流イベントを開催。風流な和文化と古民家は最高のコラボ。



▲傷みの激しかった床は基礎からリノベーション。きれいに張り終えた時の達成感はひとしおです。



▲学生の男女比はほぼ半々。プロの大工さんの指導のもと、女子も力仕事に積極的に参加しました。



▲見違えるほどきれいになった空き家。お披露会には関係者や地域の方々が大勢駆けつけました。



▲追浜の街並みを一望できるウッドデッキを設置。工具も上手に使いこなせるようになりました。



▲階段道路が入り組んだ高台の立地。車も横付けできないため、工事用の資材を運ぶのも一苦労です。



めざせ地域活性化！

## 経済学部が「K-bizマルシェ」開催

「地元の新鮮で安全な食材を安価で販売して、地域の魅力を発信しよう」という経済学部経営学科の学生によるビジネスアイデアが、京急グループの協力のもと、「K-bizマルシェ」として実現しました。

6月に京急百貨店で行われた販売会は大盛況のうちに終了。そこで中心となって活動した学生たちに、実現までのプロセスと今後の展開についてうかがいました。

### 学生発案のビジネスプランを企業とのコラボで実現

2017年度に新設される経営学部では、これまで培った企業とのネットワークを生かした社会連携教育プラットフォーム「K-biz」を構築。学生が企業とともに社会課題について考え、ビジネス的な視点から解決していく能力を養成します。その取り組みの一つとして実践されたのが「K-bizマルシェ」です。

企画運営したのは、経済学部経営学科、小山厳也副学長のゼミに所属する学生たち。リーダーを務めたのは田多祐希さん（3年生）です。

「キズのある野菜や、目的の魚以外に獲れた雑魚など、旬で新鮮であるにもかかわらず処分されてしまう食材をどうにかできないかと思ったのが、このビジネスアイデアのきっかけです」

そこで昨年末、学内のビジネスプラン・コンペティションで「三浦半島とれた美味しく新鮮な地産物を、安く地元の人に届けることで、地域を活性化したい」という企画を発表しました。



▲食材を使ったレシピや、ゼミの活動を伝えるチラシの作成にも工夫を凝らしました。

「その際に京急電鉄さんから『一緒にやりましょう』とお話をいただき、一気に実現へと動き出しました」

こうして、京急電鉄の橋渡しにより、6月に京急百貨店においてマルシェを開催することが決定。何度にもわたる企業との会議など、初めての経験の連続で苦労も多かったそうです。

「痛感したのは、私たちが考えるビジョンを100%相手に伝えることの難しさ。基本的なビジネスマナーはもちろん、プレゼンテーション力もかなり鍛えられましたね」（田多さん）



▲最初は緊張したという企業との打ち合わせ。企画から販売までトータルで経験することで、ビジネスセンスが磨かれました。

資料や議事録は、荻原未来さん（3年生）が中心となって作成しました。「ビジネス会議で使う資料としてどんなものが良いのか、最初はよくわからなくて試行錯誤しました。特に気をつけたことは見やすさ。パッと見て何を伝えたいかわかるように心掛けました」

会計、および外部との連絡を担当したのは三保克臣さん（3年生）です。

「野菜は三浦市の高梨農園さんに、海産



物は金沢漁港内の忠彦丸海苔さんに交渉して、仕入れに協力していただきました。運転資金は大学の奨学金25万円。ビジネスである以上、利益を出さなくてはいけないので、仕入れや販売の価格を考えたり、商品について勉強しました」

学生たちがこだわったのは、単に食材を販売するのではなく、地元の企業や生産者と連携を深め、地域活性につなげることに。そこでマルシェでは、三浦半島の観光紹介コーナーの設置、地元生産者や食材をPRするチラシ配布、レシピの提案なども行うことにしました。

多くのお客さんが来場しました。高梨農園の新鮮な野菜やジャム・ドレッシングなどの加工品、海苔やワカメといった忠彦丸海苔の海産物を20名の学生が販売。三浦半島の観光地や地産物に関する情報コーナーも関心を集めました。

「ぼく自身、地元こんな農園や漁港があることを、このプロジェクトに携わって知ることができました。当日はそれをパネルや制作物を通じて伝えることができたかなと思います」（三保さん）

お客さんの中には関東学院の卒業生や、子どもや孫が通っているという方もいて、思いがけず会話が広がったそう。

「地域の方々との絆やつながりを感じてうれしかったですね」（荻原さん）

160本ほど用意した大根が早々に完売するなど、マルシェは大盛況。終了後は笑顔と達成感に包まれました。



▲太くて立派な大根は150円！地元で作られた美味しい食材を求めて大勢が来場しました。黒字で終えたことは今後への大きなステップに。



▲K-biz マルシェの企画運営を務めた関東学院大学経済学部経営学科の3人。左から三保克臣さん、田多祐希さん、荻原未来さん。

### 関東学院発のプロジェクトとして定着させ活動の輪を広げたい

6月のマルシェ開催に向け、農園での収穫体験や金沢漁港海産物フェスタでの出店、京急百貨店でのプレ販売会などを実践してきた学生たち。特に4月のプレ販売会では反省点も見えたと言います。

「11時開始予定だったのですが、その前からお客さんが殺到してしまつて。レジの準備もできていなかったので、とても焦り

ましたね」（田多さん）

そこで、開始時間を看板で表示するなどの改善策を検討。また、「あなたが作った野菜なの？」と誤解するお客さんも多かったことから、この取り組みが実現するまでのゼミの活動紹介や、学生が伝えたいテーマを盛り込んだパネルを展示することになりました。

こうして6月13日（月）、ついに開催されたK-bizマルシェ。京急百貨店1階・特設催事会場には、開始前から行列ができ、

「慣れない作業でストレスを抱え込むこともありました。メンバーや周囲の方々の支えのおかげで、自分自身も大きく成長できたと思います」（田多さん）

次回の開催は11月頃を予定しているそうです。

「まずは大学全体を巻き込んでいきたい。例えば、レシピを栄養学部と一緒に考えたり、チラシなどの制作を共生デザイン学科に依頼しようと思います」

京急電鉄からは、いずれは品川駅などでも開催して欲しいとの要望もいただいているそう。「京急沿線の多くの農園や漁港と提携して、K-bizマルシェを定着させて、地域を盛り上げていけたら」と学生たちの夢は広がるばかりです。





関東学院のびのびのは園 園長

## 井上 恵子

明治学院大学文学部卒業。母校・関東学院中学校高等学校の英語科教諭着任。退職後、様々な人生の出会いや葛藤を経験し、2011年よりNPO法人クオリティワールド理事長を務める。

大学生の時に教育実習で母校である関東学院中学校高等学校を訪れて、人の成長に関わる教育の価値に目覚め、卒業後は英語科教員として着任しました。ですが5年目に交通事故に遭い、治療に専念するためやむなく退職。その後は結婚や育児などにより教育の現場から離れていました。やがて40代になり、今後の人生のミッションについて考えた時、何らかの形で教育の世界に戻れないかと思ひ始めました。そして50代で、0〜2才児の小規模保育事業などを行

うNPO法人を設立。キリスト教の価値観のもと、子育て支援や命の尊厳を伝える活動をしていました。そんな最中に、今回の園長就任のお話をいただき、思いもしなかったお話に最初は驚き戸惑いましたが、何度か小沢学院長とお会いする中で、これも一つの導きであり、私のミッションにつながる仕事なのだという思いに至り、周囲の力を借りながらお受けすることとなりました。就任して数か月が経ちますが、施設や環



▲「遊びが学び」を大切に、楽しい体験を通じて、子どもたちの想像力や可能性を引き出しています。

境に恵まれ、スタッフの資質も高い園であると実感しています。2012年度より、幼保連携型認定こども園」となり、幼稚園児でも保育時間を延長できたり、保育園児にも教育の門戸が開かれるなど、多様化する保護者のニーズにも対応しています。特に「食育」の充実ぶりには目を見張るものがあります。現在2名の管理栄養士と4名の栄養士により、栄養面やアレルギーに配慮した給食を全ての園児に提供。調理室の前には「ランチルーム」を設け、年長



▲調理室に隣接してランチルームやキッズキッチンを完備。食への興味を育み、自然の恵みの大切さを伝えています。

# 子どもと保護者とスタッフがともにのびのび成長していける園に

2016年4月、関東学院のびのびのば園に新しく就任された井上恵子園長。命に寄り添う教育への思い、本園の印象、今後の抱負をお話しくださいました。

久里浜の商店街と連携して活性化に取り組む関東学院大学は、黒船仲通り商店街の空き店舗を活用し、横須賀・三浦エリアでの活動拠点「関東学院大学久里浜オリーブランチ」を5月に開設しました。ここは普段、地元の方々の手作り品を展示販売するなど、地域の交流の場としても使われ

## サービスラーニングの導入で地域貢献と人材育成の場に



関東学院大学 建築・環境学部 教授

## リサ・G・ボンド

【専門分野】英語教育、日本思想史  
米国オクラホマ出身。理工学部と建築・環境学部で英語科目を担当。高校「英語表現」の教科書の作成や、「中学校学習指導要綱」の改定にも関わっている。

た英語教室「英語コミュニケーション」をスタートしました。現在は週2日、英会話指導やスピーチの作成、定期試験対策などを行っています。学校の授業とは違う雰囲気大切に、時にはラウンジを飛び出して散歩しながら学ぶなど、様々な構想を練っています。今後取り組みたいのは、本学で教職課程を履修する学生たちが、サービスラーニングの一環として参加し、先生役として中高

生の学びをサポートすることです。サービスラーニングとは、授業で学んだ知識や技能を、実際に地域社会の課題を解決する奉仕活動（サービス）に生かして、社会性やコミュニケーション能力を養う教育方法。現在、アメリカの大学のほとんどがカリキュラムに取り入れています。私は時々、今の学生にはコミュニケーション能力が不足していると感じています。サービスラーニングを通じて、地域の人と接し、積極性を育んでくれたらと期待しています。社会の役に立てることを自覚し、成功体験から自信を持つことは、人材育成においてとても重要なんです。現在は1階の店舗スペースで開講しているため、学生たちが集まって指導するにはやや手狭です。今後、倉庫だった2階部分の改装が済めば、本格的にサービスラーニングを導入したいと思っています。とにかく、早く学生を連れていきたいくて、わくわくしているんです。



▲毎週月曜・火曜開催

の英語教室を開くことも考えています。また、英語以外の科目で教員を目指している学生にも参加してもらい、大学全体で取り組んでいけたらうれしいですね。将来的には久里浜だけでなく、近隣の様々な地域でサービスラーニングを行い、社会と連携しながら学んでいけたらと思います。

# 久里浜の商店会の活性化に向けて「英語教室」を開講

関東学院大学は、横須賀市の久里浜商店会協同組合と協働で、空き店舗を利用した地域活性化のための活動拠点を5月に開設。米国出身のリサ・G・ボンド教授による地元中高生向け英語教室「英語コミュニケーションラウンジ」を6月に開講しました。今後はサービスラーニングの一環として、教員志望の学生が参加し、中高生の学びをサポートすることも予定しています。そこで、ボンド教授に英語教室での活動や、サービスラーニングの重要性についてお話しいただきました。



## 伝統と革新を二つの軸にした、新たな読書活動のカたち 関東学院小学校の「ほんの学校プロジェクト」

創立以来、本と触れ合う時間を大切にしている、関東学院小学校。ここ数年、力を入れているのが「ほんの学校」プロジェクトです。「本に親しみ、物語の世界に浸ってほしい」と語る岡崎一実校長は、学校全体のライブラリー化を図るとともに、独自の読書活動を実践。そこで、就任以来取り組んできた同プロジェクトの特色と、関東学院小学校が目指す教育についてお話をうかがいました。

### 創立時から構築されてきた 伝統的な読書活動が土台に

関東学院小学校は創立以来、読書活動に力を入れています。近年では多くの学校が取り入れている「朝の10分間読書」も、本校ではすでに1990年代初頭から始めているんですね。創立直後の1953年には図書室を整備し、そこでの学びを大切にしてきました。現在は全学年で週1時間、「ライブラリーの時間」という授業があり、図書室で専任の司書教諭によるブックトークや利用指導を行っています。



▲各教室での10分間の朝読書。何を読むかは自由。

語ります。このように、様々なアプローチで子どもたちの読む力や聞く力を育てています。

### 本のもたらす力は無限大 「ほんの学校」の多彩な活動

私が本校の校長に就任して5年目になります。その間、長年培ってきた伝統を継承しつつ、さらに進展させる新たな試みを行ってきました。その一つが「ほんの学校プロジェクト」です。具体的な内容をいくつかご紹介しましょう。

#### ■「関東学院小学校の100冊」選定

小学校に在る間にぜひ読んでほしい本100冊を独自に選定。すべての本を3冊ずつ用意して配架し、すぐに手に取って読めるようにしています。100冊のリストはブックレットにして全児童に配布。ノルマではなく、本と出会うきっかけや参考にしてほしいと考えています。

#### ■読書ノート

読んだ本の記録を残すためのオリジナルノートです。



▲「関東学院小学校の100冊」はブックトラックに載せて子どもが見つけやすいように別置しています。

います。特に5年生は、その作家の代表的な1冊を必ず全員が読んで講演会に臨みます。講演後は質疑応答やサイン会を実施。本を通じての貴重な体験に、子どもたちも胸をときめかせています。

#### ■ブックフェア

秋の読書週間にちなんで様々な企画を行います。11月に2日間開催するブックフェアもその一つ。銀座の書店・教文館ナルニア国の協力による展示販売会を行います。関東学院小学校の100冊やおすすめの児童書、全部で250冊ほどが展示され、実際に手に取り中身を見て注文できます。20年30年と読み親しまれてきたロングセラーを、先生手作りのポップや、教文館のスタッフ



フによる読み聞かせやブックトークでアピール。授業参観日に合わせて開催する中で、親子一緒に本選びができます。

#### ■ビブリオバトル

6年生を対象に夏休み明けに行います。クラス担任2人、司書教諭の徐奈美先生、私の4人が、おすすめの本を5分間プレゼンテーション。子どもたちが一番読みたくなった本に挙手してチャンプ本を決定します。この企画は子どもたちに大好



▲作家による講演会（角野栄子さん）



▲ブックフェア

評。実は私の本は一度もチャンプ本になったことがないの、今年こそはと思っているんです。6年生は、その後クラスで子どもたちがどうしてビブリオバトルに挑戦します。

### 司書を中心に担任や保護者も 一緒に本と親しむ環境

図書室は学校の中心に位置します。礼拝堂前のホール（ホワイエ）の棚に季節の事柄や身近な話題をテーマに本を展示するなど、校内各所に本棚を設置。施設面でも「ほんの学校」を具現化しています。こうした本校の取り組みは広く認知されているようで、図書館関係者の見学も多く、今年8月には国際学校図書館協会東京大会の参加者が視察する学校の一つにも選ばれました。

現在、司書教諭と学校司書の二人が中心となり活動していますが、司書だけに任せろのではなく、担任も参加するのが本校の読書活動です。前述のお話会やビブリオバトルもそうですし、クラスでの読み聞かせや朝読書など、担任ができるかぎり子どもへの働きかけも心がけています。ブックフェアや講演会への参加、3・4年生は親子で本を読むという夏休みの宿題を試みています。

私自身、毎年300冊以上の本を読みます。読み終わった児童書の多くはライブラリーに寄贈していますが、それらの本には私の「ひげうさぎ」のスタンプを押して目印にしています。こうすると読んだ子たちと会話が広がるんですね。校長室前のエントランスには、保護者が自由に利用できる「ひげうさぎ文庫」も設置しています。様々な取り組みをしています。



関東学院小学校 校長

### 岡崎 一実

横浜国立大学大学院教育学研究科修士課程修了後、神奈川県内の公立小学校教諭を務める。平和学園小学校の教頭、校長を経て、2012年関東学院小学校校長就任。

が、いずれも知識や語彙を増やすことを主目的とはしていません。読書感想文や冊数競争を求めることもありません。とにかく、子どもが本と仲良くなつてほしい。「あの夢この夢」という歌に「本は世界をかける。本は時間とびこえる。本は心をひきあげる」という言葉があります。目指すのはまさにこれです。たくさんの物語と出会って、自分の世界や想像力を広げてほしいですね。今後も地に足のついた活動を発展させ、子どもたちの夢を育んでいきたいと思っています。



▲「ライブラリーの時間」は週一回。司書教諭に聞き、子どもたちは必ず本を借りるようにしています。





関東学院小学校 事務主任  
須田 恭輔

野球はチームワークが大切  
それは審判も同じです

少年野球から始まって中学、高校、草野球と親しんできた須田恭輔さん。息子さんが少年野球を始めてからはコーチを務めるほどの野球好きです。

「少年野球の試合では各チームのコーチが審判を務めるのですが、ある日、同じ連盟に所属する先輩審判から社会人野球の審判をやってみないかと声を掛けられたんで

イタリア語の「喜びを見出す人」が語源のディレッタント。学院関係者の知られざる趣味を探るこのコーナー。今回登場するのは、野球を通じて自分を高め続けている方です。

## ディレッタントたち ⑤

「最初は社会人野球オープン戦の3塁塁審から始まって。3年目に初めて球審を務めました。公式戦の球審を務めたのはさらにその翌年ですね」

地道にスキルアップしてきた須田さん。野球選手と同じように、審判も球審・塁審合わせて4人のチームワークが大切なのだそう。

「見てる人はわからないと思いますが、審判にもフォーメーションがあるんです。一人の塁審が打球を追うことで空いたスペースを、他の審判がカバーし合う。その動き方には決まりがあって、ポジションごとに30種類、全部で120種類ほどあります」



▲身を守るため審判は重装備。暑い日は試合後2kg以上体重が減ることも。

です。「審判をやり始めたら、テレビや球場で野球を見ても、審判しか見なくなっちゃって（笑）」と語る熱心な須田さんですが、まだまだ自分の審判としての力量に満足していないと言います。

「1球でもストライクゾーンがぶれたりすると、ずっと引きずってしまふ。審判もメンタルが重要なんですよ」

平常心でいることの難しさを痛感し、落ち込むこともしばしばなのだとか。それでも続けているのは「やはり面白いからでしょうね」と笑顔を見せます。

そんな須田さんの目標は、いつの日か大学選手権や都市対抗野球といった大きな試合に派遣されることだそうです。

### 広報から

グローバル化やICTの急速な発展に伴う社会構造の変化、少子高齢化および人口減少による地方の社会活力の低下など、現在の日本は膨大な社会的課題を抱えています。

このような時代に関東学院は、教育・研究機関として何ができるのか。創立140周年に向けて策定された「未来ビジョン」は、大学の使命ともいえる「教育」と「研究」に加えて、「社会連携」を関東学院大学の役割のひとつとして掲げ、今年から本格的に始動しました。

社会と大学をつなぐ機関として開設された社会連携センターでは、産官学連携活動の窓口の一元化を進めるなど、地域社会の抱える諸問題について、自治体や地域企業とともに課題に取り組んでいくことの出来る

環境を整えてきました。社会に開かれた学院として、大学の持つ教育・研究資源を活用することは、教育や研究の成果を社会に還元することにもつながります。さらに、自治体や地域企業と連携することで、実際の地域社会をフィールドにした社会連携教育を推進し、専門的な技能の修得だけでなく、実践力も備えた人材の育成も期待されます。

関東学院は今後も、地域社会の持続的発展や課題解決を目指し、社会的な新しい価値の創造に貢献してきます。これからの関東学院のチャレンジに引き続きご期待ください。

関東学院 広報企画課  
(045) 786-7006 / kouhou@kanto-gakuin.ac.jp

### 関東学院 ネットワーク

関東学院の卒業生がマネージメントするお店に行ってみました。今回は相模原のパン工場と、上大岡の洋菓子店をご紹介します。

#### プチ・フルール 上大岡京急百貨店 1F 本店

住所／神奈川県横浜市港南区上大岡西 1-6-1 京急百貨店 1 階 ☎／045-848-7141  
営業時間／8:30～21:30（年中無休）  
※神奈川県内や都内に直営店舗を展開。各店の情報についてはHPでご確認ください。  
<http://www.petitefleur.co.jp>



#### 街のケーキ屋さんとして 愛され続けて 45 年

「上大岡にプチ・フルール 1 号店を開業したのが 1971 年。今年が 45 周年です」

そう話すのはお店を運営する株式会社横尾商事の横尾直樹専務です。現在、上大岡エリアでは京急百貨店 1 階でケーキショップ、ウィング上大岡 3 階でカフェテリアを

営業しています

「ケーキはもちろん、チョコレートや焼き菓子も、手間を惜しまず、自社で一つひとつ職人が手作りしています」

スイスのフェルクリン社のチョコレートを使用するなど材料も厳選。オーダーメイドにも対応し、この世に一つだけのオリジナルケーキを作ることできます。

生ケーキに加えて、現在、主力商品として店頭



が相まった、贈り物にも最適な焼き菓子です。

「小田原市根府川で収穫された、希少価値の高い早摘みのグリーンレモンを使用。3月に開催された FOOD EX JAPAN 2016 にも出店し、大変ご好評いただきました」

実はこの湘南グリーンレモンケーキの PR ポスターのデザインは、関東学院大学の学生が考案したもの。

「おかげで良いポスターができ、プロモーションに活用しています」

そんな横尾さんは小学校から高校まで三春台で学んだ、関東学院の卒業生です。

#### オギノパン 本社工場直売店

住所／神奈川県相模原市緑区長竹 2841 ☎／042-780-8121  
営業時間／9:30～18:30（年中無休）  
※神奈川県内と八王子市内に全 8 店舗を展開。各店の情報についてはHPでご確認ください。  
<http://www.ogino-pan.com>

#### 行列ができる山の中のパン工場 焼きたて揚げたてを召し上がれ

緑豊かな相模原の山中にある、オギノパン本社工場直売店。ドライブがてら遠方からも多くの人々が訪れる人気スポットです。給食パン製造業者として創業したのが 1960 年。「創業者である父親が苦労して工場を営む姿を見て育った」と言うのは、現在社長を務める荻野時夫さんです。今では弟さんやご長男とともに家族一丸となって年商 9 億円に及ぶ企業へと成長させました。



看板商品の一つが、職人の手包みで作られる『丹沢あんぱん』。こしあんやつぶあんなどの定番味や、季節限定味など、常時 10～12 種類が店頭に並びます。

そして『あげぱん』は 2010 年から 2 年連続で“神奈川フードバトル”金賞受賞。休日には 4 千個を売り上げる大人気商品です。

「揚げたての状態を提供するために、デリバリーは行わず、フライヤーのある店舗



や工場でのみ販売しています」

この本社工場は 2010 年オープン。大量生産から多品種少量生産まで対応の多機能ラインのほか、工場見学ルートやロードバイク用スタンドの設置、パン教室の開催など、大人も子どもも楽しめるパン工場を実現しました。「ここはサイクリストの聖地にもなっているんですよ」と笑う荻野社長は、関東学院大学の卒業生。カヌー部で活躍し、モントリオール五輪代表候補にもなった実力者です。スポーツで培った挑戦心は、独自の経営手腕にも息づいているのかもしれない。





## Contents

- P.1 国際研究研修センター
- P.3 社会連携センター
- P.5 KGU空き家プロジェクト
- P.7 K-bizマルシェ
- P.9 英語コミュニケーションラウンジ
- P.10 のびのびのば園
- P.11 ほんの学校プロジェクト
- P.13 関東学院ネットワーク
- P.14 ディレタントたち

学校法人

# 関東学院

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1  
法人事務局 ☎ 045-786-7028 (代)

<http://www.kanto-gakuin.ac.jp/>